

## ティンパニ奏者の宿命

打楽器と言えば、大太鼓、小太鼓、シンバルなどを思い浮かべる人が多いでしょうが、オーケストラで最も活躍する打楽器はティンパニです。

ティンパニは大きなお釜に皮を張った太鼓で、オーケストラの一番奥の真ん中辺りに陣取っています。古代ギリシャのティンパノンと言う楽器が起源といいますが、その歴史も他の比ではありません。

イタリア語のティンパニ (timpani) は、複数形の呼び方で、単数形はティンパノ (timpano) と言います。でも、単数形で呼ばれることはまずありません。なぜなら、それは通常2台以上で使用されるからです。多い時には5台並べて、あちらこちらと忙しく体をくねらせながら叩かなければなりません。それは、ティンパニが音程のはっきりした太鼓だからです。

筒型をした普通の太鼓は、叩く面と反対の面にも皮が張ってあり(和太鼓もそうです)、胴中で跳ね返った空気が色々な音を作ってしまうため、はっきりと音程が定まりません。それに比べてティンパニはケトル(「やかん」または「深鍋」の意)と呼ばれ

る大きなお釜に皮が張られ、閉じ込められた空気が規則正しく振動することで安定した音程が得られるのです。音程の違うティンパニを二つ以上並べると音階を演奏することができるわけです。

モーツァルトやベートーベンの交響曲には無くてはならないティンパニですが、曲によって音を変えるのが大変です。第1楽章では「ド」と「ソ」に合わせていても、第2楽章で同じ音とは限りません。そこで、休みの間にティンパニ奏者は太鼓に耳を近づけて、お客さんに悟られないほどの小さな音で次の音に合わせておかなければならないのです。今日ではペダルを踏んで皮の張り具合を変化させるしくみが作られています。それ以前は(今でも安いものは)皮を張っているフレームについたいくつものねじを一つずつ締めたり緩めたりして調整するという大変な作業でした。

しかも、大きな音の出るティンパニは曲のクライマックス辺りで登場することが多く、いわゆる美味しいところで「デデデン！」と出てくるわけです。しかし、その前に丁度音変えがあると、緊張が走ります。もしも、叩いた音がちょっとでもずれていたりすると、美味しいはずがめっちゃくちゃ

不味くなってしまいます。できるだけ音変えのないようにと、予め音を合わせた太鼓をたくさん並べておこうと考えても当然です。こうして、ティンパニ奏者はいくつものお釜に囲まれることになったのです。(それでも音変えは彼らの宿命ですが)

作曲家の中には、ティンパニでメロディを叩かせようと考えた迷惑な人もいます。さすがに一人で叩くには無理があるので4台のティンパニを2セット並べて2人の奏者が叩いたり(ホルスト作曲「木星」)、2セットのティンパニで、それぞれ二人ずつの奏者が同時に音を出したり(バルリオーズ作曲「幻想交響曲」)する工夫をしてくれています。それでも、本団は1セット(4台)しか所有していませんので、こんな時はどこかから借りてこななければならないのです。やはり、迷惑なことです。

因みにティンパニのお釜は、底に少しだけ穴があいてあるので、給食のお味噌汁作りには使えません。ご参考までに。

